

40	福津市立上西郷小学校	1～10
----	------------	------

## 令和5年度研究開発自己評価書

### I 研究開発の内容

#### 1 教育課程

##### (1) 編成した教育課程の特徴

###### ①編成した教育課程の背景

Society5.0に向けた人材については、これまでと同様、自己の主体性を軸にした学びに向かう一人一人の能力や人間性が問われると言われている。その中で、特に共通して求められる力の一つとして文章や情報を正確に読み解き、他者と対話する力が必要であるとも言われている。また、Society5.0における変化に伴い、これまでの同一学年での一斉の授業から、個人の進捗や能力に応じた異学年集団の協働学習への取組も求められる。

そこで、本研究開発では、世界で共通する英語の文章や情報を正確に理解したり、表現したりする「英語力（英語表現力、英語コミュニケーション力）」と言語や非言語を用いて他者と協働し、思考・判断・表現を深める「対話力（コミュニケーションスキル等）」を育成するために、「英会話科」「ダイアログの時間」を新設し、それらの力を育成する学習を目的や学習課題等に応じた異学年集団の協働学習で行うことの双方の有効性について検証を行った。このことはグローバル化が急速に進展する中で、世界で共通する英語を用いた対話力を育成することの価値と、これからの学校教育での学習の在り方の転換という視点からも意義深いと考える。

###### ②育成する資質・能力と内容

###### 英会話科

《目標》 英語によるコミュニケーションを円滑にする上で必要な見方・考え方を働かせ、実際のやり取りを通して伝え合う楽しさを味わい、主体的に英語によるコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。

外国語としての英語を身に付けるために、知識のみによって理解を深めるのではなく、体験的な活動を通して理解したり、コミュニケーションしたりできるようにする。そのために子供が実際に英語を聴いたり話したりする等、やり取りすることを重視する。やり取りが旺盛にできるようにするために、小学校段階では、聴くことが重要であると考え、6年間を通じてまずは聴く力を重視し、聴く力と話す力を段階的に育てていく。さらに、これらの力をよりよく身に付けるために、読む力と書く力を関連させて育てていくことで、コミュニケーションへの積極的な態度を育む。

【表1：英会話科におけるめざす資質・能力】

	低学年	中学年	高学年
知識及び技能	日本語と英語との音声やリズムの違いに気付き、簡単なコミュニケーションの場において、基本的な英語表現に慣れ親しむようにする。	日本語と英語との音声や語彙、リズム、文構造の違い、コミュニケーションをする上での基本的なスキルについて理解し、簡単なコミュニケーションの場において活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	日本語と英語との音声や語彙、リズム、文構造等の違い、コミュニケーションを円滑にする上での基本的なスキルについて理解し、実際のコミュニケーションの場において活用できる技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	相手の様子や気持ちを考えながら、コミュニケーションをする上での基本的なスキルを發揮しながら、身近で簡単な事柄等についてやり取りをする力の素地を養う。	相手や目的、場や状況に応じて、コミュニケーションをする上での基本的なスキルを發揮しながら、自分や身の回りの簡単な事柄等についてやり取りをする基礎的な力を養う。	相手や目的、場や状況に応じて、コミュニケーションをする上での基本的なスキルを發揮しながら、自分の生活や地域、文化の特徴等について伝え合うことができる力を養う。
学びに向かう力、人間性等	英語やそれを使う人々の生活に関心をもち、相手に配慮しながら、英語でのコミュニケーションを楽しもうとする態度を養う。	英語やそれを使う人々の文化や、コミュニケーションを図ることに関心をもち、相手の様子や気持ちに配慮しながら楽しく英語でやり取りを続けようとする態度を養う。	英語やそれを使う人々の文化や、コミュニケーションを図ることに関心をもち、相手の様子や気持ちに配慮しながら英語でやり取りを続け、互いの考えを分かり合おうとする態度を養う。

【表2：英会話科における領域別目標到達度一覧表】

	低学年	中学年	高学年
聴く「J」	<p>(1) ゆっくりはっきり話されれば、身近な人やものについて、簡単な語句を聴き取ることができる。</p> <p>(2) 目的に応じて相手の話を「聴き手スキル」を發揮しながら聴き、反応を返すことができる。</p> <p>(3) 意味が分からなかったとき、そのままにせず、分からないことを伝えようとする。</p>	<p>(1) ゆっくりはっきり話されれば、身近で簡単な事柄に関する基本的な表現を聴き取ることができる。</p> <p>(2) 相手の話を「聴き手スキル」を發揮しながら聴き、内容に応じて簡単な英語で反応を返すことができる。</p> <p>(3) 意味が分からなかったとき、尋ねるなどして分かるまで聴こうとする。</p>	<p>(1) ゆっくりはっきり話されれば、身近で簡単な事柄について、基本的な情報や話の概要を理解することができる。</p> <p>(2) 相手の話を「聴き手スキル」を發揮しながら聴き、簡単な英語で反応したり、聴き取った語句を繰り返したりすることができる。</p> <p>(3) 意味が分からなかったとき、聴き返したり、予想した語句で言い換えたりして、分かるまで聴こうとする。</p>
話すこと「発表」	<p>(1) 身の回りのことや興味のあることに関する簡単な情報や気持ちを基本的な表現を用いて話すことができる。</p> <p>(2) 相手の様子や気持ちを考えながら、目的に応じて「話し手スキル」を發揮しながら、話すことができる。</p> <p>(3) 自分が伝えたいことを多様な方法で、相手に伝えようとする。</p>	<p>(1) 自分のことや地域に関する事柄等について、考えと理由、考えと具体的説明といった内容を加えて基本的な表現を用いて話すことができる。</p> <p>(2) 相手や目的、場や状況に応じて、「話し手スキル」を發揮しながら、伝え方(速さ、声の大きさ、身振り等)を変えて話すことができる。</p> <p>(3) 自分が伝えたいことを多様な方法で、相手に伝えようとする。</p>	<p>(1) 自分のことや興味のあること、地域、日本に関する事柄等について、順序や資料を工夫しながら、基本的な表現を用いて話すことができる。</p> <p>(2) 相手や目的、場や状況に応じて、「話し手スキル」を發揮しながら、伝え方(使う語句、資料等)を工夫しながら話すことができる。</p> <p>(3) 自分が伝えたいことを多様な方法で、相手に伝えようとする。</p>
話すこと「やり取り」	<p>(1) 英語で簡単な挨拶や返事をするができる。</p> <p>(2) 身の回りのことや興味のあることについて、伝えたり簡単な質問に答えたりすることができる。</p> <p>(3) 相手の様子や気持ちに気をつけ、英語での会話を楽しもうとする。</p>	<p>(1) 英語で簡単な自己紹介や挨拶、感謝の気持ちを伝えることができる。</p> <p>(2) 好きなものや興味のあること、互いの地域の特徴など、共通の話題について、伝え合ったり質問をし合ったりすることができる。</p> <p>(3) 相手の様子や気持ち、目的を意識しながら、楽しく会話を続けようとしている。</p>	<p>(1) 初めて会った人に、英語で簡単な自己紹介や挨拶をしたり、相手の自己紹介に英語で反応したりすることができる。</p> <p>(2) 好きなものや興味のあること、互いの国の特徴など、共通の話題について、伝え合ったり質問をし合ったりすることができる。</p> <p>(3) 相手の様子や気持ち、目的を意識しながら楽しく会話を続け、分かり合おうとしている。</p>

ダイアログの時間

《目標》 多様な他者との対話活動を通して、相手の話を傾聴し、相手の立場に立って考えたり、よりよい価値観を見出したりする力、及び、円滑にコミュニケーションを進める対話スキルを身に付け、活用することができるようにする。

「ダイアログの時間」では、コミュニケーションの向上を意図したものから、気付きを得たり、新たな価値を生み出したりするといったパフォーマンスの向上を図る。そのためにも、アサーティブな話し方を含めた伝える力とともに、受け取る力としてのスキルの獲得も位置付けていく。

【表3：ダイアログの時間等で育成する資質・能力】

	全体目標	低学年	中学年	高学年
知識及び技能	他者理解を深め、よりよい協働関係を築くための方法を理解するとともに、対話に必要な技能を身に付ける。	(1) 友達の考えを聞いたり、相手に伝わる話し方のポイントを用いて、自分の考えを伝えたりすることができる。	(1) 相手の気持ちに寄り添いながら聴いたり質問したりする中で、相手の考えを理解し、話の中心を意識して伝えることができる。	(1) 相手の顔色や表情・姿勢などを観察し、相手の気持ちや話の意図を捉えて聴いたり、話の内容が明確になるよう伝えたりすることができる。
思考力、判断力、表現力等	オープンな心で相手の話を聴くことで自らを内省し、新たな気付きや認識を生み出す力を身に付ける。	(2) 友達の考えに進んでかかわる中で、新たな考えに気付き、自分のことをみんなにはっきり話すとともに、自分のことは自分で行うことができる。	(2) 多様な考えに進んでかかわる中で、自分のことを見直し、自分の意見や気持ちをわかりやすくまとめるとともに、友達を認め、励ますことができる。	(2) 仲間との深い対話を通して、自分と異なる意見も理解しながら、思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動することができる。
学びに向かう力、人間性等	主体的に活動に参加し、自己や集団としての成長やその喜びを感じる心情・態度を身に付ける。	(3) 交流活動日々の学習に共同的に参加し、学んだ気付きを活かして、友達と助け合おうとする。	(3) 交流活動日々の学習に協同的に参加し、これまでの学び方を目的に応じて活用しながら、友達と課題を解決しようと努力する。	(3) 日々の学習や異年齢集団の活動に協働的に参加し、自分らしさを発揮しながら、生活や学習上の課題を仲間と解決しようとする。

英会話科と「ダイアログの時間」の関係

ダイアログの時間を、全教育課程での対話活動の要と考えている。ダイアログの時間で培ったスキルを生かして英会話科を始め、教科・領域の対話活動を行うよう年間カリキュラムの見直しを行い、そのことで、それぞれの学習効果が上がるものとする。



【表4：ダイアログの時間における領域別目標到達度一覧表】

領域	スキル	低学年	中学年	高学年
聴くこと	聴き手スキル	<p>【ア】相手の話を受け入れる聴き方ができる。</p> <p>「(ポ)パワーアップ話し方」 ①していることをやめて、相手を見て ②最後まで ③反応しながら(身振り、手振り、表情) ④相手を認めて ※レベル順に指導</p> <p>【イ】相手の話を聴いて、質問をすることができる。「(ポ)質問のまきしお」 【ウ】相手の話を聴いて、反応することができる(事実のバックトラック)。</p>	<p>【ア】聴き方のポイントを意識し、相手の立場にたって聴くことができる。 (どのレベルまでできているのかを意識)</p> <p>【イ】相手の顔色や表情・姿勢などを観察しながら聴くことができる。「(ポ)しかのこま」 【ウ】相手の話を聴いて、反応することができる(事実と気持ちのバックトラック)。</p>	<p>【ア】聴き方のポイントを意識し、相手に反応しながら聴くことができる。 (どのレベルまでできているのか意識)</p> <p>【イ】相手の顔色や表情・姿勢などを観察しながら聴くことができる(キャリアブレーション)。 【ウ】相手の話を聴いて、要約しながら、反応することができる(事実と気持ちのバックトラック)。</p>
		<p>【ア】相手に伝わる話し方ができる。</p> <p>「(ポ)パワーアップ話し方」 ①相手を見て ②伝わる声の大きさと ③伝わる速さと ④最後まではっきりと</p> <p>【イ】5W1Hを意識して話す。 「(ポ)いつ(When)、どこで(Where)、誰が(Who)、何を(What)、なぜ(Why)、どのように(How)」 【ウ】事柄の順序に気を付けて、考えをつくることができる。「(ポ)相手に伝わりやすくするための順序、初め-中-終わりを意識」</p>	<p>【ア】相手に伝わる話し方のポイントを意識して、話すことができる。</p> <p>①～④+ ⑤絵や図を見せて (どのレベルまでできているのか意識)</p> <p>【イ】話の中心を意識して話すことができる。 【ウ】資料を活用して話すことができる。 【エ】自分の考えを提案することができる。 【オ】相手に伝わりやすくするために、話の中心に気を付けて、スピーチの内容をつくることができる。 【カ】プレゼンテーションの仕方を理解することができる(プレゼンテーションスキル)。</p>	<p>【ア】相手に伝わる話し方のポイントを意識して、話すことができる。</p> <p>【イ】インタビューしたことを報告することができる。 【ウ】自分の考えを相手の理解度に応じて提案することができる。 【エ】事実と意見・感想を区別してスピーチ内容を考えることができる。 【オ】やり取りのあるプレゼンテーションをすることができる(プレゼンテーションスキル)。</p>
話し合うこと	話し合いスキル	<p>【ア】話題に沿って話し合いを進めることができる。</p>	<p>【ア】互いの意見の共通点や相違点に着目しながら、目的に応じて話し合いを進めることができる。 【イ】ワールドカフェの仕方を知り、活用することができる。「(ポ)ひじのな」</p>	<p>【ア】互いの立場や意図を明確にしながら、目的に応じて、計画的に話し合いを進めることができる。 【イ】ブレインストーミング・ファシリテーションの仕方を知り、活用することができる。「(ポ)ヒカジリ」</p>
関係づくり	対人関係スキル	<p>【ア】挨拶のしかたを知り、生活の中で活用することができる。</p> <p>(ポ)気持ちのよい挨拶 ①たちどまって ②相手を見て ③元気よく※③は中学校区統一</p> <p>【イ】自己紹介をすることができる。 「(ポ)はちのあき」 【ウ】ストレスを知り、対処法を考えることができる。 【エ】ふわふわ言葉・ちくちく言葉について考え、学校生活で使うことができる。 「(ポ)Iメッセージ」 【オ】自分も相手も大事にして自分の気持ちを伝えて伝える言い方(アサーション)ができる。「(ポ)やさしい、いいて」</p>	<p>【ア】挨拶のしかたを知り、生活の中で活用することができる。</p> <p>(ポ)気持ちのよい挨拶 ①～③+ ④心をこめて (どのレベルまでできているのか意識)</p> <p>【エ】自分の気持ちを切り変えて伝える言い方を知り、自分の気持ちを場面に応じて伝えることができる。「(ポ)Iメッセージ」 【オ】友達への声のかけ方を場面や状況に応じて伝えることができる(断るときのアサーション)。「(ポ)断るのは、こわかい」 【カ】怒りや衝動を感じたときの落ち着かせ方を理解し、活用することができる。 「(ポ)心の信号機」</p>	<p>【ア】挨拶のしかたを知り、生活の中で活用することができる。</p> <p>(ポ)気持ちのよい挨拶 ①～④+ ⑤自分からはっきり (どのレベルまでできているのか意識)</p> <p>【エ】自分の気持ちを場面や相手に応じて伝えることができる。「(ポ)Iメッセージ」 【オ】友達への声のかけ方を場面や状況に応じて伝えることができる(話し合うときのアサーション)。「(ポ)きじか」 【カ】ストレスの解消やトラブルの解決の仕方を理解し、活用することができる。 「(ポ)トラブル解決4兄弟」</p>

## (2) 教育課程の内容は適切であったか

### ①「英会話科」の教育課程について

年々、児童の「英語で他者と対話すること」についての関心が高まっている。特に高学年になるにつれ、英語での対話活動を終えた後の満足感や達成感の高さが顕著に見られる。そして、中学校進学後も英語の授業への意欲の高さが他校出身の生徒と比べ際立っている。このようなことから、「対話を通して人間関係を築く」ことをねらった「ダイアログの時間」と「対話を続ける楽しさを味わう」ことをねらった「英会話科」の創設、それらの双方向の補充・深化をねらった教科等横断型のカリキュラムは、外国語に初めて出会う児童の発達段階からも適切であったと考える。

### ②「ダイアログの時間」の教育課程について

本研究では、「対話力」の向上を新領域「ダイアログの時間」における対話スキルの習得と活用に求めてきた。特に、アサーション等の対人関係スキルを重視していることが、「ダイアログの時間」の特色である。実際、子供の対人関係スキルは確実に上昇しており、それは、初めて相対する地域の高齢者や外国の方との対話の場で、相手の気持ちや様子に配慮しながら、対話そのものを楽しもうとする姿にも確実に表れている。

一方で、自分の考えを理由とその根拠を明確にしながらか主張するといった論理的思考表現に関するスキルの習得、発揮は不十分であったと考える（特に英語において）。実際に行った対話活動も地域住民や園児、外国の人との対話を通して互いを分かり合うことを目的としたものがほとんどで、この点に関しては、小学校のみならず、中学校までの9カ年を見通したスキルの指導を考えていくべきであろう。

### ③「ダイアログの時間」の教育課程の精選

「ダイアログの時間」でめざす「話し手スキル」「聴き手スキル」「話し合いスキル」については、教科等の言語活動の中で指導することが可能なものもある。一方、よりよい人間関係を築いたり、相手へ配慮しながら対話を続けたりする「対人関係スキル」や「聴き手スキル」等については、全教育課程で必要となるスキルである。多様な他者と互いの考えを分かり合いながらよりよい関係を築いていく対話力の必要性は、今後ますます重要になると思われる。これらのことから、どのようなスキルを取り出して指導することが必要か、精選するべきである。

## (3) 授業時間等についての工夫

### 英会話科

第1学年	年間 34 時間 (内 20 時間はモジュール)
第2学年	年間 70 時間 ( " )
第3学年及び第4学年	年間 70 時間 ( " )
第5学年及び第6学年	年間 105 時間 ( " )

	English Time(モジュール)	学年学習(基本単元)	異学年協働学習(重点単元)
主な活動内容	・歌 ・チャンツ ・スモールトーク ・語彙やフレーズ復習	・主に教科書教材を活用した4技能の習得	・ダイアログの対話スキルを活用した学習
授業時数	・15分×2回/週 年20時間程度	・1年 15時間 ・2, 3, 4年 40時間程度 ・5, 6年 75時間程度	・1年 4時間程度 2, 3, 4年 10時間程度 ・5, 6年 10時間程度
学習形態	全体, ペア	・学習内容に応じた必要な単語や表現を繰り返し練習する学習 ・全体, ペア, 小集団 (到達度別, 課題別)	・個の到達度に合わせた異学年のグルーピングによる学習 ・全体, ペア, 小集団 (到達度別, 課題別) ※GT, 地域の方, ALT との交流活動

### ダイアログの時間

第1学年	年間 34 時間 (内 10 時間はモジュール)
第2学年～第6学年	年間 35 時間 ( " )

	対話スキル学習	対話学習
内容	【低学年】 ○ 教科等における対話活動の取出しと振り返り（話し方、聴き方、質問、アサーション、バックトラッキング）	【低学年】 ○ 保育園・幼稚園児、地域の高齢者との交流（交流会、昔遊び、ふれあい給食）
	【中学年】 ○ 対話活動の取出しと振り返り（傾聴、バックトラッキング、プレゼンテーション、ワールドカフェ）	【中学年】 ○ 地域の福祉・環境にかかわる人々との交流（交流会、ふれあい給食） ○ 外国語を母国語とする方との交流 ※英会話科重点学習での位置付け
	【高学年】 ○ 対話活動の取出しと振り返り（ファシリテーション、バックトラッキング、反映的傾聴、ブレインストーミング）	【高学年】 ○ 地域の方との交流（交流会、ふれあい給食） ○ 外国語を母国語とする方との交流 ※英会話科重点学習での位置付け
		【縦割りグループ】 ○ 縦割りグループでの話し合い活動（縦割り遊び、学期ごとのめあて決めと振り返り等）
時数	○ 15分×1回/週（年11コマ） ※ モジュール ○ 45分×1回/月（年11コマ）	● 45分×1～2回/月 ※ 教科内容は、教科の時数に組み込む。 ※ 縦割りグループによる地域との対話活動のみカウントとする。（縦割りグループにおける振り返り活動は、行事カウントとする）
形態	各学年一斉及び異学年集団	各学年一斉及び異学年集団

## 2 指導方法・教材等

### (1) 実施した指導方法等の特徴

#### 英会話科

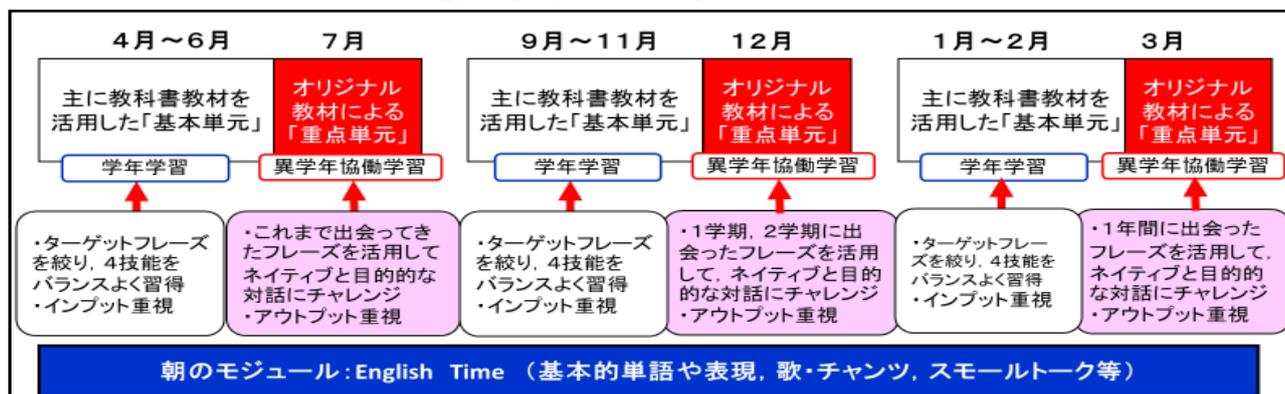
#### ①基本単元（学年学習）

教科書教材を主に活用し、新しく出会ったフレーズを繰り返し使いながら習得する。

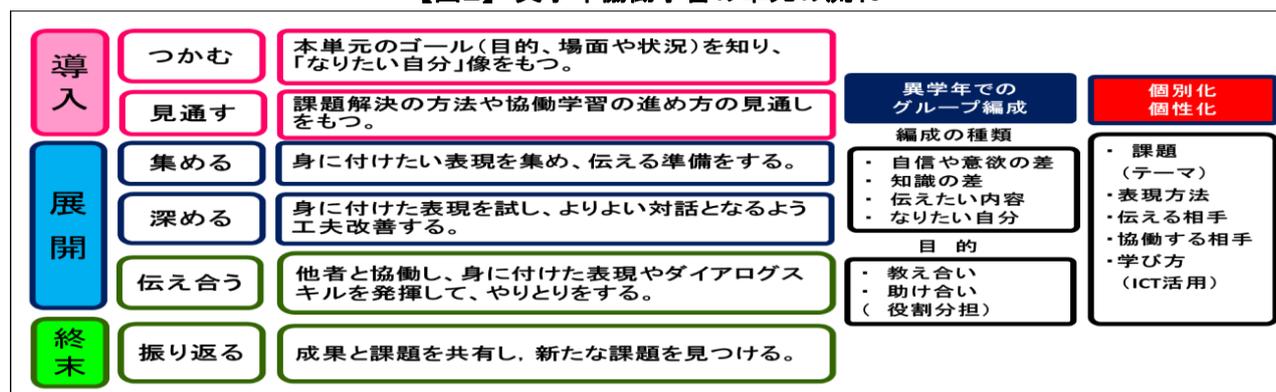
#### ②重点単元（異学年協働学習）

これまで学んだフレーズを活用してネイティブとの対話にチャレンジし、実践的な英会話力の習得や英語コミュニケーションの楽しさを味わう。

【図1】単元配列の考え方



【図2】異学年協働学習の単元の流れ

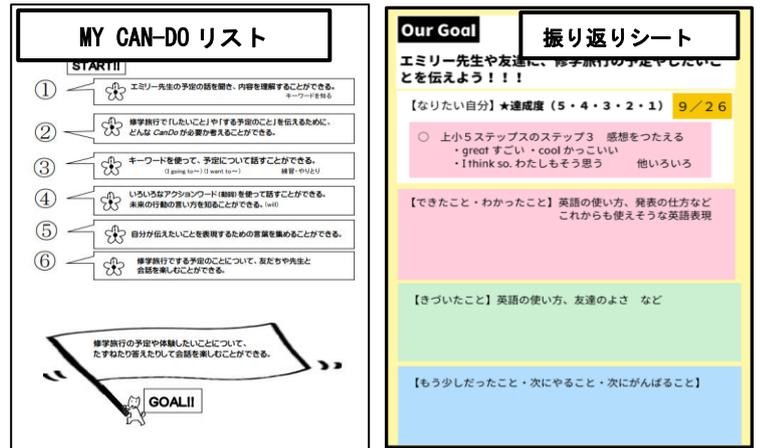


③MY CAN-DO リストと振り返りシートの活用 【図3】 MY CAN-DO リストにリンクした振り返りシート

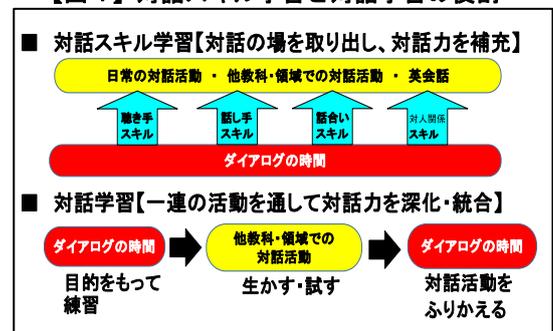
めざすゴール像に対する子供自身の距離感、課題について自己評価しながら、その後の学習に取り組めるよう、単元ごとに本校独自のCAN-DO リスト(=MY CAN-DO リスト)を作成する。

④朝の English Time (モジュール) におけるスキル学習

週2回モジュールとして行い、英会話におけるスキルの向上を図る。研究4年次では、「フォニックスやコミュニケーションを練習する曜日」「自分の課題から教材を選び、ICT を用いて個別学習をする曜日」等、曜日によって内容を変更し、英会話の基礎となる発声・発音の力や、進んで会話を続けようとするコミュニケーション力を育てる。



【図4】 対話スキル学習と対話学習の役割



ダイアログの時間

①対話スキル学習

対話の場面を取り出し、対話の基礎となるスキルを身に付けることをねらいとする。他教科・領域での対話活動で生かすことを意図して対話スキルを練習し、実際の対話活動後に自身の対話の様子を振り返るといった一連の活動を通して、対話力を深化・統合することをねらいとしている。

②朝の活動「モジュール」

月の始めに、その月に行う内容や流れについて文書を作成し、全職員で共通理解のもと、実施をする。内容は、発声や相手にわかりやすく伝える話し方などの話し方の基本(=声トレ)から、その月に実施する「ロングの時間」の内容練習に至るまで、年間カリキュラムに基づき行う。

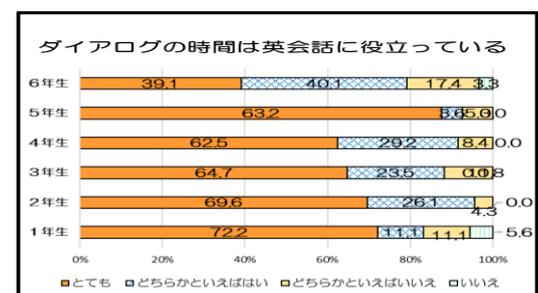
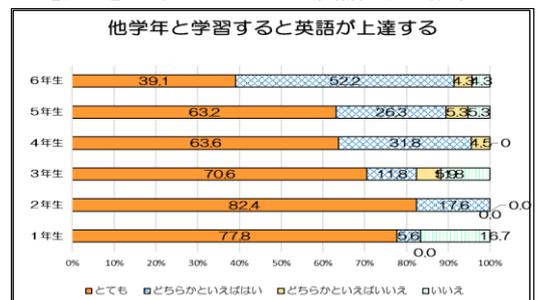
③「ロングの時間」

月ごとに、「①実施する月・学年・単元名・育てたいスキル、②授業におけるねらい、③授業の流れ、④参考資料、⑤学習プリント」の指導案・教材等を用いて、発達段階に合わせて実施する。基本的な流れは、「イントロダクション(導入)→説明(めあてに向けた話し合い)→モデリング(望ましい姿を示す模範演技観察)→スキルのポイントの提示(その時間に学ぶスキルの要点提示)→ロールプレイ・エクササイズ(スキルの要点を練習すること)→フィードバック(振り返り)→まとめ」としている。

(2) 指導方法等は適切であったか

- 各学年の9割近い子供が異学年協働学習を通して英語力のアップにつながっていると感じていることが分かる。また、3年次は下の学年の方が異学年の協働学習の効果を感じていたのだが、4年次は近接学年の上の学年ほど異学年で学習することの効果を感じていることが分かる。これは、上の学年がこれまでの学習を通して、協働学習のスキルを身に付けたり、前年度の学習の経験からの学びや改善を学習中に発揮できたりしたことが要因と考えられる。
- どの学年も肯定的に答えた子供が7割を超えている。ダイアログの時間に学んだ「話し手スキル」「聞き手スキル」をもとに対話力を高め、その力を「英会話科」のやり取りにいかしていることが分かる。子供が相手に関心を持ち、「もっと話したい」「もっと聴いてみたい」と思うことでやり取りが続き、人物の理解や関係が深まっていく。ダイアログの時間に学んだスキルは「英会話科」をはじめ様々な教育活動、子供の人間関係作りに有効であると考えられる。

【図5】 子供アンケート(英語力)の結果



## Ⅱ 実施の効果

### 1 児童・生徒への効果

#### 【英会話科】

#### ① 子供アンケートの結果から

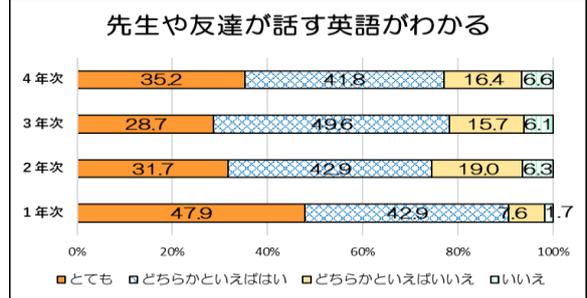
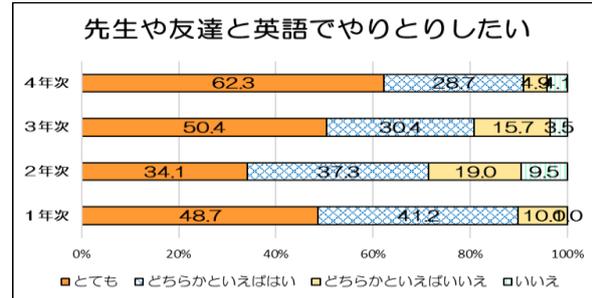
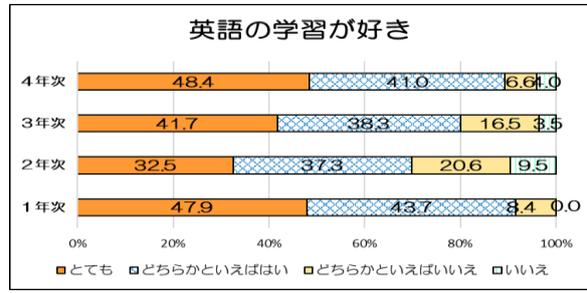
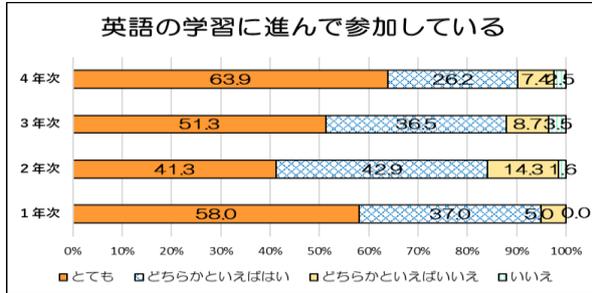
#### ア 英会話学習への意欲、主体的に取り組む態度

研究開発に関する子供アンケート(英語力)

実施時期：令和5年7月

対象：全子供

評価水準：4段階（とても=4、どちらかといえばはい=3、どちらかといえばいいえ=2、いいえ=1）



研究1年次から2年次は4つの項目で肯定的な回答をした子供が減り、意欲面での低下が見られた。これは、コロナの影響で「会話がしにくい」と感じた子供がいたことが要因の一つと考えられる。

2年次から3年次、3年次から4年次にかけては「英語の学習に進んで参加している」「英語の学習が好き」「先生や友達と英語でやりとりしたい」の項目で、肯定的回答が増加した。これは、評価部が作成した「MY CAN-DO リスト」や「振り返りシート」、教材部が作成した「上小英語力5 STEPS」などを活用して子供が個別最適な学び方を経験し主体的に学習を進めたこと、異学年協働学習で子供自ら学び方を調整する経験を経たことが素因の一つとなっていると考えられる。

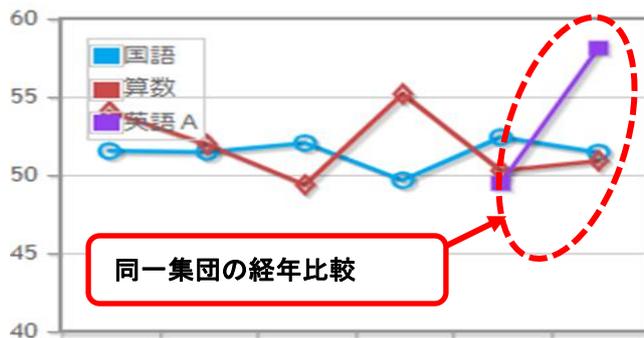
一方、「先生や友達が話す英語がわかる」という項目は、増加傾向には至らなかった。低学年では、ゲームやクイズを通して楽しみながら英語表現を使う活動が多いが、中学年、高学年と学年が上がるにつれ、言語材料が増え、高度で多様な英語表現が求められる。また、ネイティブの方に英語で説明したり質問に答えたりする言語活動を仕組んだので、「わからない」と感じる子供が増えているものとする。また、研究の年次が進むにつれて活動の内容のレベルが上がり、うまく対話できずますます苦手意識を強めてしまった子供もいたと考えられる。

#### ② 標準学力調査（英語）の結果から

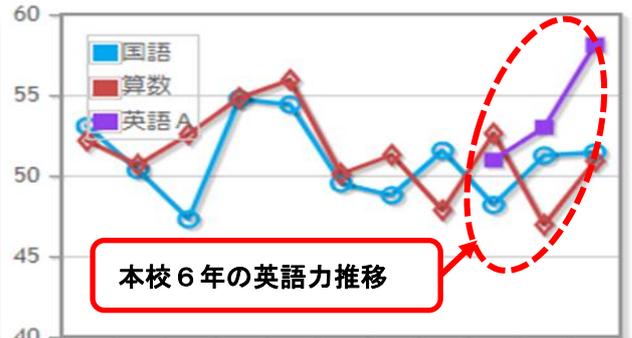
実施時期：令和3年2月、令和3年12月

対象：令和3年度第6学年(N=22)、令和4年度第6学年(N=25)

調査項目：英語Aの数値



【図6】 学力調査(同一集団比較)

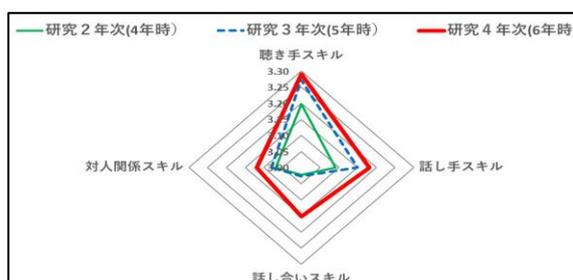


【図7】 学力調査(同一学年6年比較)

グラフは、市内小学校6年生を対象に実施した標準学力調査（英語）の結果である。同一集団の経年比較でみると、国語・算数はほぼ横ばいの得点率を示しているが、英語の得点については非常に伸びが見られる（図6）。また、同一学年（6年）子供の経年比較でも、英語の正答率が年々上昇している（図7）。これらは、英会話科を取り入れ、教科横断的なカリキュラムマネジメントを行った成果であると考え。特に、授業の中でテーマを設定し、友達やALTと英語でやり取りをする活動を多く設定したことは英語力を高める上で有効であったと考える。

## 【ダイアログの時間】① 子供用対話力アンケートの結果から

**研究開発に関する子供アンケート(対話力)**  
**実施時期**：計3回 令和4年2月(研究2年次)、  
 令和5年2月(研究3年次)、7月(研究4年次)  
**対象**：第6学年子供(4年時、5年時、6年時)  
 N=23(2年次)、N=23(3年次)、N=24(4年次)  
**調査項目**：全18項目  
**評価水準**：4段階(いつもしている=4、している=3、  
 あまりしていない=2、していない=1)



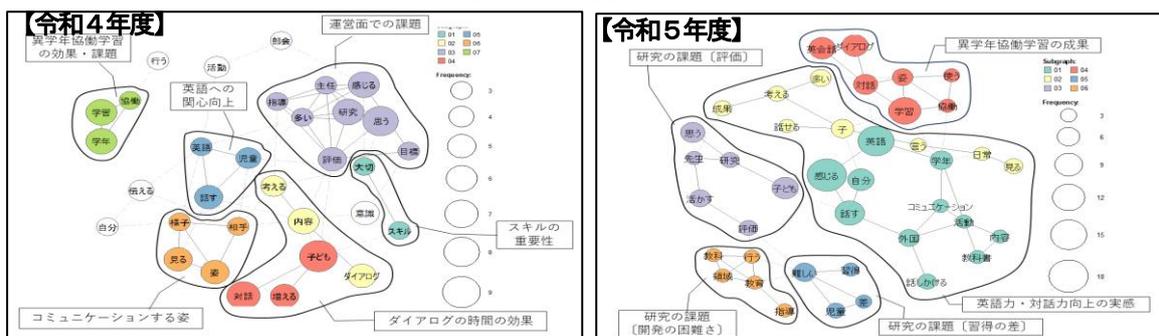
現在の第6学年は本研究を3年生時から実施してきた子供であり、研究開発における積み上げをより多く積んできた学年といえる。そこで、定期的に行っている子供用対話力アンケートにおいて第6学年を対象に分析を行った。すると「聴き手スキル」、「話し手スキル」「話し合いスキル」「対人関係スキル」の4項目について学年を重ねるごとにスキルが向上していることが分かった。

「聴き手スキル」については4年生時から得点が高く、相手意識をもちながら聴く姿勢ができていくことがうかがえる。「話し手スキル」「話し合いスキル」においては、6年生に向けて年々得点が大きく伸びていることがうかがえる。これは、子供が相手意識をもちつつ自分の気持ちを伝えようとする意識の高まりの表れだと推察する。また、6年生という最高学年として、異学年協働学習の際に「話し合い活動」を包括的に進めていく役割を担うことで、相手も自分も大切にする話し合いの仕方が身に付いたことを実感している子供がいることがうかがえる。

これらのことから、ダイアログの時間を教育過程に取り入れ、英会話科を含めた、他教科・領域と教科横断的に関連させて行ってきた取り組みが、子供の対話力の向上の一助となったと考える。また、対話力の向上には時間をかけた積み上げが必要であることが分かる。

## 2 教師への効果

### ◎テキストマイニングによる令和4年度と5年度の比較から



令和4年度の場合、最多頻出語は「子供」であり「対話」「ダイアログ」との関連性が深く表れている。このサブグラフから、ダイアログの時間により対話する子供の姿が多く見られるようになったことを効果として実感していることがわかる。また「英語への関心向上」を示す語句がサブグラフを形成しており、「ダイアログの時間の効果」とつながって、子供達の「コミュニケーションする姿」を研究の成果として感じていることがわかる。また、対話を成り立たせるために「スキルの大切さ」＝「スキルの重要性」を教師が分かってきたこともサブグラフに表れている。

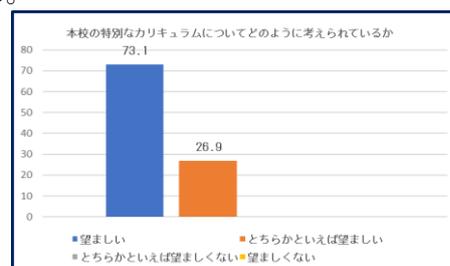
令和5年度の再頻出語は「感じる」であり、頻出度の高い「英語」「話す」と強い共起を示して「英語力・対話力向上の実感」としてサブグラフを形成している。すなわち、研究の成果として他者とコミュニケーションを図る姿が日常化し、物怖じせず話しかける子供が増えてきたことが実感できている。

また、頻出度が3番目の「学習」は、「英会話」「ダイアログ」と強い共起を示し、新教科・領域における異学年協働学習の成果としてサブグラフを形成している。すなわち、異学年の子供に加

え地域の方や外国の方など多様な人とのかかわりにより対話力の向上が感じられているといえる。一方で、課題として「開発の困難さ」「評価」「習得の差」がサブグラフとして表れている。現行の学習指導要領に拠らない開発研究ゆえの難しさも感じている。

### 3 保護者等への効果

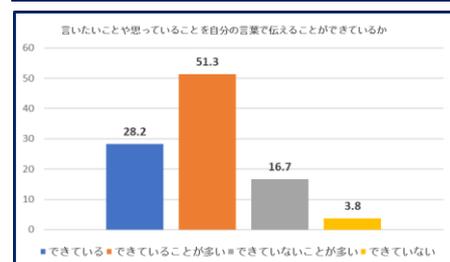
子供達の学習に取り組む様子や家庭での様子から、保護者の方が本校の特別なカリキュラムに関して一定の満足感をもっていることが分かる。また、他校にはない英会話科を低学年から学習することや人間関係づくりに大切なダイアログの時間等、新教科・新領域の意義や意味を感じながら取り組むことに本校のカリキュラムのよさを感じていただいている。



## Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

### (1) 時制や助動詞の指導の複雑さ

過去形については、ごく簡単な一部の動詞に限定して指導すれば理解し使うことはできた。しかし、未来形、現在進行形までは、小学校の段階で理解し使うことが難しい。さらに、より高度な自分の考えを主張するためには、can以外の助動詞を使いこなすことで表現の幅が広がるが、あるユニットで使用した言語材料が、知識として定着するまでには、幾度となくそれを使うことが必要で、そこまでの言語活動の場を確保することは小学校段階では難しいと考える。小学校段階においては、自分の身の回りのこと、地域や国の特徴等を外国の方と分かり合うことを目的にすえ、楽しく会話を続けることに必要な語彙の拡充に重きをおくことが、英語への意欲を低下させず、中学校への円滑な接続ができるのではないかと考える。



### (2) 「書くこと」「読むこと」の指導の必要性

本研究では、「話すこと・聴くこと」のみ中学2年相当の言語材料（一部抜粋）をカリキュラムに組み込み、「書くこと」「読むこと」の指導については、子供の発達段階を考慮して現行学習指導要領6年相当の内容にとどめてきた。外国の人とのやり取りにおいて、音声言語を重視した学習はたいへん効果的であると考える。音声言語に重きをおいたからこそ、英会話に親しむことができ、意欲を高めることができたと考えている。しかし、「書くこと」「読むこと」の指導の必要性も、取り扱う言語材料が多岐にわたり高度になるほど、実感している。「読むこと」によって細部まで理解が進み、「書くこと」によって記憶として定着するし、視覚情報優位の子供も少なくない。

また、個別に学習を進めるにあたり、文字言語による学習は必要であると考えている。

### (3) 外国の方との実際の対話の場の確保

英語を通して人間関係を築く力を高めるにあたり、実際の対話の場をもつことが重要である。その場を、どう確保していくのが課題である。

### (4) 研究指定終了後の教育課程再編について

現在、国語科、総合的な学習の時間等、複数の教科領域の時数、内容を削除し「英会話科」「ダイアログの時間」を創設している。この研究での成果をふまえ、めざす子供像は維持しつつ、以下の方針で教育課程を再編する。

- 「英会話科」は教科書教材を元とした基本単元とこれまで基本単元で学んできた言語材料を駆使してやり取りを続けることに特化した重点単元とから構成している。今後、学習指導要領を基本としながらも、重点単元については、回数を年2回程度に減らし、「総合的な学習の時間」として継続していく。
- 「ダイアログの時間」は、アサーション、バックトラッキング、ファシリテーション等、人間関係を築く上での基盤となる対話スキルから成り立っている。子供自身も「ダイアログの時間」の学習成果を実感するようになってきている。そこで、効果が認められた指導内容を精査し、①国語科や学級活動等、教科領域の対話活動において意図的に指導するもの、②総合的な学習の時間に「ダイアログの時間」として位置付けるものに整理し、本校独自のカリキュラムを作成していく。